慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二つのローザ・ルクセンブルク論(1)
Sub Title	Zwei Studien über Rosa Luxemburg (1)
Author	神代, 光朗
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.11/12 (1975. 12) ,p.840(60)- 846(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19751201-0060
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19751201-0060

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二つのローザ・ルクセンブルク論 (1)

神代　光朗

はじめに
一　両著の目的と基本性格
1.　J・P・ネトルのローザ伝の目的と基本性格
2.　G・ラトチュン，A・ラシッツァのローザ論の目的と基本性格
二　方　法
1.　ネトルのローザ伝の方法
2.　ラトチュン，ラシッツァのローザ論の方法
三　基本内容
1.　ネトルのローザ伝の基本内容
〔以下次号〕
2.　ラトチュン，ラシッツァのローザ論の基本内容
四　二つのローザ論の問題点
むすび

はじめに

ローザ・ルクセンブルクの思想と学説に関しては，彼女の死後，さまざまな解釈が加えられ[1]，しばしば自身のイデオロギー的立場の正当化のために，ローザ自身の研究は充分に深められずに利用されるという傾向がみられたし，今日でもそうした傾向は跡をたっていないように思われる。そこで今日，代表的と思われる二つのローザ研究を検討し，現時点におけるローザ研究の到達点を明らかにする一助としてみようと思う。

二つの研究とは，一つはチェコ生まれのイギリス人で，オクスフォードとペンシルヴァニアの二つの大学で教授の職にあった故J・P・ネトルのローザ伝[2]であり，もう一つはドイツ民主共和国マルクス主義・レーニン主義研究所のローザ全集[3]刊行編集委員会責任者のG・ラトチュンとA・ラシッツァの共著になるローザ研究[4]である。この二つの研究は，その立場，方法，基本的内容において著しく対照的な相違を示している。

注(1)　この点に関しては，西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」(『歴史学研究』No. 239〔1960年3月号〕)が参照さるべきである。西川氏はその中で，ルクセンブルク評価の二つの流れとして，大きく分けるとボルシェヴィズムとルクセンブルクの違い「にもかかわらず」評価するテールマン，エルスナーらKPDの見解と「その故に」評価するローゼンベルクら反ボルシェヴィズムの二つの立場を指摘している。

(2)　J. P. Nettl., Rosa Luxemburg, London Oxford University Press 1966. この本は最近，邦訳が出ている（諫山正，川崎賢，宮島直機，湯浅赳男，米川紀夫訳『ローザ・ルクセンブルク』上下，河出書房新社，1974年11月，'75年1月）。この本の書評としては松岡利道「Nettl, J. P., Rosa Luxemburg」（季刊『社会思想』1—2，'71），邦訳の諫山正氏の「訳者あとがき」，梅田美代子，阪東宏「ローザ・ルクセンブルク研究をめぐって」(『歴史評論』No. 306, 1975, 10) の梅田氏による Б. А. アイジンの書評の紹介などがある。松岡氏はネトルの研究がマルクス主義者としてのローザにとっての経済学的研究の重要性，「階級形成的視点」を欠落し，マルクス主義そのもの，ローザのマルクス主義，経済学も彼の方法に沿ってしか理解しないという限界をもっていることを指摘しながら，SPD＝孤立・官僚の党という規定，ローザを大衆＝行動，反官僚主義と把える立場を高く評価し，又，ポーランド論を最大の功績と主張している。諫山氏の「あとがき」もネトルの研究方法を官僚制の問題を明らかにした点で，又，修正主義論争に社会思想史的に新しい視角を開いたという点で，更にポーランド問題の研究という点でユニークで類を抜きんでていると主張している。これに対して梅田氏の紹介によるアイジンの書評は，マルクス主義の立場から，ネトルの研究の方法と内容の批判を行なっているもので，SPD論，修正主義論争，帝国主義論，社会主義革命論，党の役割などについてネトルの主張を全面的には否定していないが，レーニン主義をしりぞけるブルジョア自由主義的見解とみている。

(3)　Rosa Luxemburg., Gesammelte Werke, Bd 1～Bd 6 Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag Berlin 1970～'75.

(4)　Annelies Laschitza, Günter Radczun., Rosa Luxemburg, Ihr Wirken in der deutschen Arbeiterbewegung, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Diez Verlag Berlin 1971.

一　両著の目的と基本性格

1.　J・P・ネトルのローザ伝の目的と基本性格

ネトルのローザ伝の直接の動機は，ドイツ第三帝国の没落と戦後ドイツへの関与からドイツへの関心が起こり，更にさかのぼって第一次大戦及びマルクス主義，そしてローザへとたどりついたのだということである。[5] しかし著者のローザに対する関心は第一に反ボルシェヴィキの立場に基づくものであり，第二にそうした立場から，従来のソヴィエトや東ドイツなどの歴史家のローザ論への不満に基づくものである。

第一の点についてみると，一般的に，西欧の読者にとってローザへの関心は反ボルシェヴィキ，すなわちレーニン主義に対抗するラディカリズムのよりどころがローザの中に見出せるということであり，彼女の中にマルクス主義の民主的伝統——暴力と極端な民主主義(violence and extreme democracy)——を見出しうるからだと言われている。[6] 更に又，ローザの死んだ時期の故に彼女はトロツキーと違い公認のマルクス主義・レーニン主義からも背教者とはされず，反スターリン主義の武器としてトロツキーよりも幅広い勢力を結集しうる有効な武器とみなされうるからだ，と。ネトルはこうした立場を継承，敷衍して，ローザを，社会民主主義と共産主義への近代マルクス主義の分裂に積極的にかかわりあいながら，そのどれにも属していない，すなわち，多くの社会主義に属していながらどの社会主義にも属していない，社会民主主義でもボルシェヴィキでもない独自性をもち『第三の道』[7]をゆくものとして，今日の中国やフルシチョフの立場にもシフトしながら，[8] その意義を強調している。彼によれば，ローザは先進国にとって重要性をもっており，その学説の核心は行動と参加の教義であって，参加する諸個人の総体をともなうヒューマニティ[9]の故に意義があるのだ，と。第二の点については，かつての主に東ドイツのローザ論——例えばエルスナーなど[10]——がローザの思想をルクセンブルギズム＝「誤まりの体系」とし，レーニンとの見解の相違に基づいてローザの誤まりを指摘することへの反発から，体系としてのルクセンブルギズムというものを取り壊そうという動機に由来している。

2.　G・ラトチュン，A・ラシッツァのローザ論の目的と基本性格

ラトチュン，ラシッツァの共著であるローザ研究では，1898年～1919年におけるドイツ労働運動の中で，ローザの果した役割を，マルクス主義・レーニン主義歴史学の立場から分析し，ローザの生涯の仕事に対する歴史的・批判的研究が目ざされており，ドイツ社会民主党に優勢であった理論的見解と，第二インタナショナルの指導的な党の実際の実践との関連で，ローザの役割を歴史的・具体的に秩序づけることが課題とされている。研究の中心は，ローザの理論的・実践的活動をドイツに限定しており，労働者階級の反帝闘争の戦略と戦術の基本問題についてのその見解の発展に集中し，経済学上の見解については，その生成史と主要な内容の叙述，帝国主義，軍国主義，日和見主義との政治的・イデオロギー的闘争に関連づけられているのみである。基本的には，ローザをレーニンの戦友(Kampfgefährtin) として理解し，ローザの仕事とその遺産は，反ファッショ民主主義革命と社会主義革命を経て今日，ドイツ民主共和国 (DDR) において実現されており，その意味で彼女は，DDRにとって「歴史であると同時に現代であり，遺産であると同時に実現である」[11]とされている。従って又，ローザを民主社会主義の元祖とみなしたり，ネトルのように，ローザの中に「第三の道」を見出そうとしたり，レーニン主義への攻撃の材料を見出そうとする者は，ローザの革命的生涯の全体の意義を決して把握し得ないこと，[12] ドイツ共産党 (KPD) の創立は，彼女の闘いの最も重要な結果であり，それはドイツにおいて階級的基礎の上での統一の前提と共産主義インタナショナル創設のため

注(5)　Nettl, op. cit., p. v 邦訳上，1頁。
(6)　Ibid., pp. 1～2. 邦訳上，17頁。
(7)　Ibid., p. 751, p. 786. 邦訳下，323頁，357頁。
(8)　Ibid., pp. 4～5. 邦訳上，19～20頁。
(9)　Ibid., p. 827. 邦訳下，398頁。
(10)　Fred Oelßner., Rosa Luxemburg, eine kritische biographische skizze, Diez Verlag Berlin 1952. エルスナーのこの本は，ローザの文献資料や歴史的記述の点で，確かにネトルの言うような欠陥があるかも知れないが，ローザの学説の批判的スケッチとして大変すぐれたもので，その基本内容の価値は今日でも充分あると思われる。
(11)　Laschitza, Radczun, op. cit., s. 11.

の前提をつくったのだと指摘されている。そして，この立場からドイツ連邦共和国（BRD）はじめ西側諸国のローザ研究の批判をネトルの著書を含めて行なっている。社会主義か帝国主義かの問題については，ローザにとって中間の立場はなかったこと，ローザのヒューマニズムは，帝国主義と戦争の残忍性に対して社会主義のモラル[13]を主張したもので，超階級的な人間性や市民性をそこに見出すことはできないことが主張されている。

二　方　法

1.　ネトルのローザ伝の方法

ネトルのローザ研究の方法的特徴をなしているものは，彼自身の表現において近代社会学（modern sociology）と政治分析の方法[14]によるものであって，それが概念上の諸貢献をなしていると主張されている。この点で，彼の社会学的方法が特に目だっていると思われるのは，第一に彼の独特の社会民主党論であろう。彼は社会民主党にとってのマルクス主義の根本問題は党と社会との関係の問題であって，これはドイツ社会民主党（SPD）のみでなく，マルクス主義にとっての根本問題である，という認識[15]に基づいて修正主義論争におけるSPD正統派（orthodoxy）の役割を，党の社会からの孤立（isolation）の路線であると規定する。そして，1905年以降のローザの課題を，この孤立の打破と社会との関係の獲得という見地で把え，この論理の延長線上に彼女の大衆ストライキ論と帝国主義論を把握するのである。

第二に彼は，このような社会学的方法をローザの思想のとりわけ組織面についての研究，その背景と環境との研究に適用している。彼女の組織面についての思想の背景をネトルは，1893年にポーランド社会党（PPS）から分離したポーランド王国社会民主党（SDKP），後のポーランド・リトワニア王国社会民主党（SDKPiL）の独特の性格――ディヴィッド・リースマンの社会学の用語であるピア・グループ（peer group）[16]にあたるもの――に求めている。そして，ここにレーニンのボルシェヴィキ的党との相違があるというわけである。こうした方法上の特徴とともにネトルのローザ伝は，地域的にみて，ドイツ，ポーランド，ロシアとローザの活動のほとんどすべての範囲にわたっていること，ローザの私生活を政治的生活と結びつけ，彼女の性格的特徴や友人関係，文芸上の趣味まで，かなり多方面にわたって膨大な資料に基づく研究を行なっていることが特徴的である。

2.　ラトチュン，ラシッツァのローザ論の方法

内容的にはこの本は，労働運動についての学説史といった性格のものである。それ故に，あくまで科学的社会主義――マルクス主義――の流れの中でローザの位置を明らかにするという姿勢が貫ぬかれており，そうした意味で，マルクス主義・レーニン主義の立場が明確にされている。この点はネトルのようにマルクス主義の枠を越えた見地からローザを研究する立場との根本的な違いがみられる。但し，従来のブハーリン[17]や

注(12)　Ibid., s. 9.

(13)　例えば，ドイツ革命の最中，スパルタクス綱領の起草の少し前に，社会主義的市民道徳（sozialistische Bürgertugend）について，次のような主張を行なっている。「社会主義社会は，各人誰しもが，その地位において一般的福祉のために完全な熱情と感激をもち，同胞に対して完全な献身性と共感をもち，最も困難なことをもあえて敢行する完全な勇気と粘り強さをもつ人を必要としている」（Rosa Luxemburg, „Die Sozialisierung der Gesellschaft", Die junge Garde, Berlin Nr. 2 vom 4. Dezember 1918. Rosa, Gesammelte Werke Bd. 4 s. 436.）cf. Laschitza, Radczun, op. cit., s. 468.

(14)　Nettl, op. cit., pp. vii～viii　邦訳上，5頁。

(15)　Ibid., p. 540 footnote 1. 邦訳下，101頁註(73)，同453頁。なお，ネトルはこのような独特の社会民主党論を彼の別の著書 „the German Social-Democratic Party 1890—1914 as a political model, past and present, No. 30, April 1965" で述べていることを指摘している（Nettl, op. cit., p. 120 footnote 1. 邦訳上，132頁註(6)，同489頁）。

(16)　Ibid., p. 23. 邦訳上，38頁註(11)，同472頁。cf. David Riesman, The Lonely Crowd, New Haven 1950, or Winston White, Beyond Conformity, New York, 1961, 又，ローザやレオ・ヨギヒェス（Leo Jogiches）らのSDKPiLにおける各人の指導者としての役割は，近代社会心理学における小グループ中の指導者の出現の型に一致しているとネトルは言う（Nettl, op. cit., p. 269 footnote 1. 邦訳上，289頁，註(36)，同508頁。cf. P. E. Slater, 'Role differentiation in small groups' in A.P. Hare, E.F. Borgatta and R.F. Bales (eds.), Small Groups, New York 1955.）。

(17)　Nikolai Bukharin, Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals, Unter dem Banner des Marxismus, 1925/26. 本書は，コミンテルン内部における綱領的路線をめぐるタールハイマーとブハーリンの論争の産物である。ブハーリンは，主にマルクスとレーニンの再生産表式についての見解を拠りどころとして，ローザの『資本蓄積論』及びトゥガン・バラノウスキーの再生産表式を批判しており，ブハーリン自身の見解の幾つかの誤まりを別にすれば，ローザの経済学説の古典的批判としての意義を今日も失っていない。

エルスナーのローザ論のように，ローザの学説や思想を主としてレーニンの，又はスターリンの批判を典拠にして批判するという方法ではなく，ローザの文献資料を詳細に分析し，その内容に基づいて評価を加えるという方法，そうした意味で歴史的・批判的方法[18]がとられているのであろう。そういう点では，1950年代のエルスナーの研究よりも方法的にも資料的にも大幅に前進していると思われる。又，経済学説についてはどうかというと，ローザの経済学そのものの分析よりも，むしろ彼女の経済学上の労作が，彼女の階級闘争論，反帝闘争と日和見主義との闘争においてもっていた意義が，レーニンの場合と比較されて論じられているところにこの本のユニークな面がある。マルクス主義経済学と唯物史観や階級闘争論との関係という極めて今日的課題がそこには含まれているのである。

三　基本内容

1.　ネトルのローザ伝の基本内容

原書で862頁にわたるネトルの膨大なローザ伝を分析してみると，その内容の骨格は，主に次の三つのものから成っている。すなわち，第一に，彼のＳＰＤの構造についての把握である。彼はエルフルト綱領とカウツキーの正統派（orthodoxy）マルクス主義に象徴される戦前のＳＰＤは，次の如き矛盾をもっていたと考える。エルフルト綱領は，そのマルクス主義的理論にもかかわらず，革命についての言及は避けられており[19]，マルクス主義の教義の純粋性を擁護する正統派の立場は，結局，ブルジョア社会と党との二律背反をもたらし，ブルジョア社会からのＳＰＤの孤立をもたらした。正統派はビスマルクの社会主義鎮圧法の時代を通じ，ベーベルに代表されるようにＳＰＤの管理と組織の成長を中心に，国会選挙で多数を獲得する議会主義戦術を主にとった。すなわち，「古き良き戦術」(die alte bewährte Taktik)。その結果，ＳＰＤは一方ではドイツ第二帝制の下で強大な勢力になり，その輝かしい孤立主義の故に「国家内国家」(a state within a state)[20]を形成していたが，他方では，それと社会との関連を必然的に含まざるを得ない議会戦術とは矛盾した構造をもつようになった，と。

第二は，ローザの理論の核心をどう把えるかであるが，ネトルはそれを大衆（mass）と社会（society）との行動を通じての摩擦（frictions）[21]から生ずる階級意識論にありとみなし，それが後に政治的大衆ストライキ論から帝国主義論へと行動理論（a new doctrine of action）[22]として展開していったと考える。

第三は，彼のポーランド社会主義についての研究を土台として形成された独特の組織論である。彼はローザの思想の背景を SDKPiL のピア・グループ的組織にありとみる。これは，対等な資格でほぼ同年齢から成る知識人の自発的な協力に基づく緩い組織であり，ＳＰＤの高度に官僚的で形式民主主義に基づく寡頭制とも陰謀家的忠誠（conspiratorial loyalty）に基づくボルシェヴィキの命令的組織[23]とも異なるもので，後にスパ

注(18)　Laschitza, Radczun, op. cit., s. 6. ローザは1901年に『フォアヴェルツ』でマルクスとエンゲルスの遺稿の出版について論じた時，(Rosa, „Aus dem Nachlaß unserer Meister", Werke, Bd 1, Zweiter Halbbd., Berlin 1970, s. 134.) 将来のマルクス伝は，マルクスその人をその環境から，環境を歴史から，政治史を経済史から説明するのに成功するかも知れないと望んでいたが，著者はこうした方法が科学性の至上命令だと言っている（Laschitza, Radczun, op. cit., s. 5)。歴史的・批判的（historisch-kritisch）というのは，そのような内容であろう。

(19)　Nettl, op. cit., p. 116. 邦訳上，128頁。エルスルト綱領には革命という言葉は用いられていないが，労働者階級の資本主義的搾取に対する闘争は必然的に政治闘争であること，政治権力の獲得の必要性については明確に述べられている。しかし，この権力の性格，ドイツにおける革命の任務と国家の形態などについては述べられていず，こうした点がエンゲルスの批判をうけることになった。エルフルト綱領が第一部の最大限綱領と第二部の，労働者階級の当面の要求を定式化した最小限綱領とからなっており，この両者の結びつきが明確でないことが軋轢のもとになったことが，ネトルにより指摘されている（Ibid., p. 116 邦訳上，128頁)。このことは1898年の SPD 党大会における戦術に関する論争からも知ることができる。究極目標に関連して綱領第一部の放棄ないしは軽視を主張し，第二部の充実を，とりわけ農村地帯でのアジテーションに関して主張するシャイデマンや，ハイネ，ボイスらと綱領の全体の重視を強調するシュタットハーゲン，ホフマン，ベーベルらとの意見の対立が明瞭にみられる。前者が修正派もしくは改良主義の代表であることは，言うまでもない(Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der SPD. Abgehalten zu Stuttgart vom 3. bis 8. Oktober 1898, ss. 86—94.)。

(20)　Nettl, op. cit., p. 246. 邦訳上，262頁。

(21)　Ibid., p. 226. 邦訳上，242頁。

(22)　Ibid., p. 513. 邦訳下，76頁。

(23)　Ibid., p. 266, p, 495. 邦訳上，283頁註(34)，同508頁，下58頁。レーニンの中央集権的組織原則（『何をなすべきか？』を参照せよ）を陰謀家的忠誠と理解するところに，ネトルのレーニン主義への理解の程度と反ボルシェヴィキの立場が示されている。

ルタクス・ブンドを除いては，組織モデルとして後継者を残さなかったと，言われている。[24] ネトルは，この三つを議論の中心として展開してゆくのであるが，その内容の主なものを，この三点との関連で簡単にふれておこう。

まず，修正主義論争についてのネトルの独特の評価である。ベルンシュタインについてのネトルの見方は，極めて従来のマルクス主義の評価と異なるものである。すなわち，ベルンシュタインはマルクスの根本原理を否定したのでも社会主義の諸目的を放棄したのでもなく，[25] 又，新しい哲学や直接行動への特殊な提案をしたのでもなく，ＳＰＤの孤立を克服しようとして，実践と理論を近づけるという立場から革命についての恣意的仮定を除去したのだ，と。そしてローザは，革命的実践のみに重点をおくパルヴス，理論の擁護のみに重点をおくカウツキーとも異なって，一応，理論と実践の結合の観点から修正主義を批判し，その結合の媒介になったのが階級意識論だというのである。しかし，修正主義論争においては，ローザはカウツキーやベーブルら党執行部と同盟し議会戦術を擁護したが故に，1907年以降までその階級意識論を具体的に行動理論として徹底できず，正統派の擁護にとどまったのだ，と。ネトルは，正統派の修正主義に対する勝利は，マルクス主義の理論を守ったかも知れないが，社会からの党の孤立を一層深め，ＳＰＤの矛盾を増大したのみであって，実践的には現状維持（maintainance of the status quo）に結びついたのみであり，その代表がカウツキーだと言うのである。[26] そして，この論争におけるローザの役割をネトルは政治的には正統派に手を貸し，党の孤立路線を支持する結果になったと極めて否定的にみている。[27] 全般的に，修正主義論争そのものを彼は副次的論争[28]だとみており，そればかりか，例えば，1891年のバーデンの予算投票への賛成などについて，修正派を孤立原理に挑戦し，社会との結合（link）を獲得[29]しようとしたものとみなしてさえいる。ここには修正主義論争におけるマルクス主義正統派の役割の，ほぼ全面否定とも言える見解がうかがわれるのである。

次に，ローザの階級意識論が行動理論として，どのように展開されていったかについてのネトルの見解である。彼によると，ローザは，ロシア革命の影響のもとに，1905年の終わりまでには正統派擁護をほぼ改め，彼女本来の階級意識―行動理論へ転換した，と。[30] そしてこの転換は，1905～07年の経験に基づく大衆ストライキ論争の時期，1907年のインタナショナル・シュトットガルト大会，1910年のカウツキーとの対決，1911～14年の第二次モロッコ危機から第一次大戦勃発の時期へと次第に発展し，政治的大衆ストライキ論から最後の時期の帝国主義概念の確立へと進展するとみなされる。このなかで，ネトルはローザの帝国主義論を極めて高く評価する。大筋は次の如きものである。修正主義論争での正統派の勝利はＳＰＤの矛盾をむしろ深め，その矛盾の故に社会がＳＰＤに手をさしのべた時，党はそれをつかんだのであり，それが，1914年8月4日の戦時公債へのＳＰＤの賛成投票なのだ，と。[31] 帝国主義のもとでは，社会の側が社会民主党に攻勢をかけるのであり，ローザは帝国主義をその効果（effect）の面から，全体性，普遍性（totality, universality）として把え，それに対して社会民主主義も全体的（total）に反応しなければならないという見地から，帝国主義との闘争におけるカウツキーの消耗戦術（Ermattungsstrategie）――議会主義に対し，階級意識―行動理論を大衆ストライキ論として展開した，と。ネトルはローザの帝国主義論を①ダイナミックな大衆行動の必要と技術（大衆ストライキ），②社会民主党に対する社会の増大する統一と激烈さ，それに対する社会民主党の側の全体的で能動的（active）な反応の必要，

注(24) Ibid., p. 268. 邦訳上，284～285頁。
(25) Ibid., pp. 204～205. 邦訳上，220～221頁。
(26) Ibid., p. 248. 邦訳上，264頁。
(27) Ibid., p. 250. 邦訳上，265頁。
(28) Ibid, p. 786. 邦訳下，356頁。邦訳では，ここで「修正主義者の議論」は云々，となっているが，これは「修正主義論争」の誤訳であろう。
(29) Ibid., p. 127, p. 538. 邦訳上，137～138頁，邦訳下，99頁。
(30) Ibid., p. 513, p. 537. 邦訳下，75～76頁，同98頁。
(31) Ibid., p. 605. 邦訳下，168頁。ネトルはこうした立場から，1914年8月4日のSPDの裏切りを修正主義の影響とみる見方に極めて否定的である（Ibid., p. 249. 邦訳上，265頁）。しかし，このようなネトルの見解では，シッペルやハイネらとの世紀転換期におけるローザの軍国主義についての論争や，植民地問題における修正主義の見解の真の意義が理解されなくなるであろう。

③帝国主義を不可避とする経済的基礎としての資本蓄積と総括している。[32] ローザの帝国主義概念においては，社会と社会民主党の二つが本質的要素であった，と。そのうえで，ネトルはローザの学説の特徴をルカーチにならって総体性(totality)に求め，[33] 党と社会との関係という立場から，体系，党，規律，組織，社会からの疎外，すなわち静的なものと，大衆，階級意識，行動，すなわち動的なものとを対置し，前者はカウツキー的なもの，又，レーニン的なものでさえあるが，後者がローザ的なもの，又はトロツキー的なものと，かなり図式化して把えている。[34] こうした見地からネトルは，ローザをルクセンブルギズムという体系において把握する共産主義の歴史学に反対している。

もう一つネトルのローザ帝国主義論評価の特徴として言えることは，第一に，『資本蓄積論』の見方である。彼は，これはアカデミックな関心に基づくものであって，帝国主義の必然性の論証という意味はあったかも知れないが，政治的諸目的と直接関係がないと主張し，[35] それは彼女の帝国主義論を影で蔽う障害物だとまで言っている。[36] そして『蓄積論』をもってローザの帝国主義論を批判しているエルスナーらの見解を不当だとみなし，[37] 彼女の経済学は政治理論と矛盾しており，政治的不活動の理論にさえなるのだ，と主張する。

そして彼女の帝国主義論は『蓄積論』以外に散在する政治的諸文献にあるのだ，[38] と。

第二に，レーニンの『帝国主義』との比較において，ローザのが1911～14年の戦前，レーニンのが16年の戦中であるという違いを決定的だとみなし，レーニンもローザも帝国主義を政治問題として取り上げる点では共通だが，ローザの方が，より一層徹底して生き生きしているのに対し，レーニンの場合は，帝国主義概念に社会民主主義の要素が含まれていず，無味乾燥でロ

注(32) Ibid., p. 536. 邦訳下，97頁。

(33) Ibid., p. 631. 邦訳下，194頁，同470頁註 (85)。「接近の全体性 (totality)」を訳者は「考察方法全体」と誤訳している。マルクスの弁証法的方法を歴史過程の総体性認識として理解し，ブルジョア科学の方法はこれに対して，個々の諸現象を抽象化ないしは孤立化し，それを自律的現実性とみなす個人又は個別資本の立場からの観察だと考えるルカーチは，弁証法についてのこうした理解にたって，ローザの修正主義に対する論戦や『資本蓄積論』での方法をケネーやマルクスの方法の継承として，極めて高く評価している（ルカーチ『歴史と階級意識』平井俊彦訳，未来社，55頁。『ローザとマルクス主義』平井俊彦訳，ミネルヴァ書房，62～80頁)。

ローザ・ルクセンブルクが修正主義を批判する際に，又，当時の世界市場の経済学的認識に際して弁証法的方法をマルクス主義の真髄とみなし，それを意識的に適用しようとしたことは，これらの時期の彼女の文献を見れば明瞭に理解できるところである。しかもそこで，ローザが個々の部分現象より全体の関連，発展の傾向性というものを重視していることも明瞭で，そうした意味でローザの思想の特徴を総体性に求めるのも誤まりではないだろう。又，ローザの修正主義批判がその歴史的，弁証法的方法という点で，SPD の他の思想家に比べすぐれていたことは，ラトチュンやラシッツァの研究でも指摘されている。しかし，同時に，ローザの弁証法には，しばしば重要な弱点が伴っていたことを注意しなければならない。例えば，1904年にロシア社会民主労働党内の組織問題の原則をめぐる「多数派」と「少数派」との分裂の政治的意義を議事録に基づいて，具体的に分析したレーニンは，その著『一歩前進，二歩後退』の中で，論戦の発展過程の全体が弁証法的にすすんだことを述べているが，その際，それぞれの段階の特殊性を正確に知ること，一つ一つの戦闘の具体的事情を研究しない限り，闘争の全体についての理解のできないことを明らかにし，マルクス主義がヘーゲルからうけついだ弁証法の最も重要な基本命題は，抽象的真理は存在せず，真理は常に具体的であるということだと指摘している。そして，そのような見地から，この組織問題でのローザのレーニンへの批判に対して，レーニンは，ローザがロシアの党内の論争の現実的基礎を充分研究せず，マルクスの弁証法を口にしながら，論戦の具体的内容を無視し，特定の諸事実に基づく相対的真理だけを取り扱っているところで，絶対的真理を問題にするという風に，弁証法のイロハに反しているという手厳しい批判を行なっている(『一歩前進，二歩後退，エヌ・レーニンのローザ・ルクセンブルクへの回答』)。又，『蓄積論』に関してもレーニンはローザの弁証法は折衷主義 (Eklektik) であるという批判を行なっている。ローザが諸事象を全体的に，又，傾向的に認識しようとしたすぐれた弁証法論者であったことは確かだと思われるが，同時に，ローザの思考方法には，特殊性や個別性より一般性を強調し，優位におく傾向，そのため，特殊性や個別性――全体の契機をなす――が充分に深く認識されつくさないという欠陥が伴っているように思われる。

(34) Nettl, Ibid., pp. 545～546, p. 539. p. 7. 邦訳下，105～107頁，同100頁，上22頁。

(35) Ibid., p. 535, p. 836, pp. 840～841. 邦訳下，96頁。下408頁。同412頁。

(36) Ibid., p. 530. 邦訳下，91頁。

(37) Ibid., p. 217, pp. 532～533. 邦訳上，233頁，502頁註(35)，下94頁，452頁註(64)。

(38) Ibid., p. 521. 邦訳下，83頁。

(39) Ibid., pp. 521～522. 邦訳下，83～84頁。

ーザの方がパイオニア的だとさえ言っている。[39]

次に組織問題についてであるが，ネトルはSDKPiLに象徴されるローザの組織論と，その背景をSPDやボルシェヴィキとの比較においてむしろ評価し，SPDについては，党の成長が官僚制を必然化したと述べており，[40] ローザの行動論は，それを打破するのに有効だったと考えている。又，ローザの組織論が過程としての組織論であることを認めながら，自然発生性の問題については，自然成長（natural）と自発性（spontaneity）とは違うとして，前者はカウツキー，後者がローザの立場だとし，むしろそれを評価しており，唯，時折，ローザが自然発生的要素を過度に強調しすぎているのだとみなしている。そして，ローザを自然発生論者とみなすのはスターリン時代のボルシェヴィキによって作られたのであるとして，ネトルはこれに反対している。しかし，「遅すぎた分離」の問題については，彼は，その事実とそれに対する従来の共産主義歴史家達の批判を一応は受容せざるを得ないが，又，他方では，自然発生性を肯定する立場に立っているため，大衆に影響力を与え，下から党を再掌握するというローザの根拠づけに共感し，ローザの階級意識形成論を批判することができない。更に，1918年のドイツ革命の過程で，1月ストにおいても，夏～秋にかけてもスパルタクス派が大きな影響力を持ち得なかったこと，労兵評議会でも少数であったことについて，ネトルは，当時，組織らしいものをもっていたのは革命的オプロイテのみで，スパルタクスは組織論の未成熟なまま権力奪取論を展開したのだとしているが，同時に，その点でネトルはローザの理論を批判するのでなく，組織が欠如しているところでは大衆行動論としてしか展開できなかったのだと，むしろローザの理論の欠陥を正当化している。[41]

最後にネトルの研究の今一つの特色と思われるレーニンに対する理解の問題がある。彼はレーニンを極端に経験的な戦術家とまで言っているように，[42] レーニンには伝統に拘束されたり，何らかの教義に反対する恐れなしに行動し得たという点でカウツキーと違っているが，その理論にはカウツキー正統派的なところも多分にあって，そのためカウツキーの本質を見抜くのがローザより遅れたのだとか，民族問題や大衆観でのレーニンとカウツキーの類似が指摘されている。帝国主義論についてはすでに述べたが，階級意識形成論や組織論についてのローザとレーニンの違い，又，1904年の論争については，基本的にネトルの立場は，ロシアとドイツの客観的条件の相違に帰着させようとする傾向が強く，[43] ローザの立場はメンシェヴィキ的でドイツの条件を理想化してロシアに移植する立場で，その限り，ボルシェヴィキに対する無理解があったが，又，レーニンの中央集権制に基づく党理論を特殊ロシア的で，一般的有効性をもたないと言っている。[44] 又，民族問題やプロレタリアの同盟軍としての農民や，自由主義者の評価ということではネトルは，ローザに批判的だが，『ユニウス・ブロシューレ』の民族解放戦争についてのレーニンのローザ批判に関しては，ローザは一般論をドイツの特殊状況に結びつけたのだとしてローザに共感し，レーニンを特殊な文脈からのローザ批判だと言って批判している。『ロシア革命論』でのローザのボルシェヴィキ批判については，ネトルも特に権力の問題で，ローザにはレーニンのようなリアリズムが欠けていたと批判的な主張をしているが，全般的にみて，レーニンによりローザに共感している著者の立場は明白である。〔以下次号〕

（経済学部助手）

注(40) Ibid., p. 408. 邦訳上，423頁。ネトルによるとSPDの官僚制について早くから警告していたのは，M・ウェーバーであった（cf. Weber, Address to the Verein für Sozialpolitik, in Schriften des Vereins für Sozialpolitik, 1908）。ローザは組織の問題についてはあまり大きな役を演じなかったとされている。官僚制の成長は党の一般的成長の部分なのだから，あえてそれにローザは反対しなかったのだ，と。しかし，組織の成長が必然的に官僚制をうみだすとみるネトルのこのような見解は，組織の具体的な質，内容をぬきに論ずるならば，極めて不合理な抽象と言わざるを得ない。

(41) Ibid., p. 726. 邦訳下，293頁。

(42) Ibid., p. 544. 邦訳下，105頁。

(43) Ibid., p. 227. 邦訳上，243頁。

(44) Ibid., p. 290. 邦訳上，305頁。ネトルがここで取り上げている『何をなすべきか？』で，レーニンは中央集権的な原則を党の一般的な組織原則とみなし，民主主義の問題については，それぞれの国のおかれている政治的条件による差異を主張している。従ってレーニン自身はロシア的条件のみを考慮に入れていたとは考えられない。そのことも含めて，レーニンの条件をロシア的だとみるのなら，それはレーニン主義そのものの妥当性をロシア的とみる見解だと言えよう。